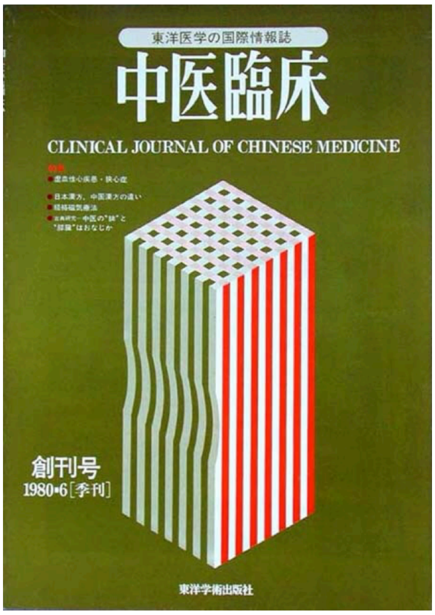
●猪越恭也先生への取材後記

『中医臨床』創刊と猪越恭也先生

新設の本コーナ「日本における中医学導入の先駆者たち」は、本学会事務局長の瀬尾港二氏の発案だ。最初にご登壇いただいたのが薬剤師の猪越恭也先生。猪越先生を取材するために瀬尾氏と打ち合わせをしているなかで、猪越先生との出会いや『中医臨床』発刊の経緯なども付記として書けと強く要求されて、書かせていただくことになった。

『中医臨床』発刊の経緯



『中医臨床』創刊は 1980 年 6 月。中国の中医文献情報を翻訳して紹介することを主眼にする雑誌である。筆者はもともと東方書店という神田神保町にある中国書籍の輸入販売書店で営業の仕事をしていて、医学はまったくの門外漢であった。大学で中国語を専攻し北京で翻訳の仕事に従事していたこともあって、なにかのお役に立てればと考えて取りかかった。

『中医臨床』発刊を思いついた背景は針麻酔であった。1972 年のニクソン訪中をきっかけに米国で針麻酔報道が行われ、日本でも大いに話題になった。日本での針麻酔報道は、毎日新聞が１頁全面を割いて特集を行ったのが最初であった。これは月刊『中国画報』に初めて紹介された針麻酔特集をもとに組まれたものだ。筆者が当時親しくしていた毎日新聞の今田好彦記者にもちかけ

て実現した。日本の鍼灸界ではこの報道以来大騒ぎになって、東京都鍼灸師会が『中国画報』を大量にまとめ買いして配布した。以来、鍼灸に脚光が集まり、「中国バリ」が大いにもてはやされ、鍼灸院が活況を呈した。閑古鳥が泣いていた鍼灸学校には学生が大量に押し掛けることになった。私の勤めていた東方書店では、鍼灸学校の学生が毎日大勢押し掛け、書店の階段や床を埋め尽くして座り込み、中国語の原書をむさぼり読んでいた。書店の社員であった私はその光景を不思議な思いで眺めていた。今から考えても、鍼灸学生が原書をむさぼり読むあの風景は印象深く心に残っている。医学界においても、なぜ針に鎮痛作用があるのかに興味がもたれ、生理学者や麻酔学者が盛んに鍼灸を研究し始めた。医師と鍼灸師が頻繁に中国を訪問し交流を始めた。なにか大きな変化を予感させる空気であった。

　当時、中国の鍼灸関係書は徐々に翻訳出版され始めていた。『快速針刺療法』といった「裸足の医者」用の簡単な鍼灸マニュアルの類だった。しかし、雑誌文献の翻訳はまだ誰も手をつけていなかった。中国でも文化大革命が終結してようやく『新医薬雑誌』(現在の『中医雑誌』)や『新中医』、『中西医結合雑誌』など数種の雑誌が復刊され始めたばかりであった。そこで、これらの雑誌文献のなかから面白そうなものを選んで紹介してはということから、『中医臨床』の構想が始まった。相談にあがったのが、当時月刊『東洋医学』誌編集長だった谷田伸治氏、『医道の日本』誌の社長・戸部雄一郎氏、小川卓良先生、浅川要先生らだった。みなさん大いに賛成し、支持を約束してくださった。小川卓良先生のご紹介で猪越恭也先生とお目にかかることになった。

猪越恭也先生との出会い

猪越先生はお目にかかった最初からこの企画に賛成し、身を乗り出してご協力くださり、ご指導くださった。数年分の中医雑誌のバックナンバーに目を通すと、なぜか「冠心Ⅱ号方」関連の記事が非常に多いので、これらを猪越先生にお渡しししておいたら、数日後、猪越先生が興奮して、「この処方はものすごく革命的な処方です。ぜひこれをメインにしましょう。私が数編選んで翻訳してみます。」といってくださり、さらに解説記事まで書いてくださったのが、創刊号の「中成薬『冠心Ⅱ号方』について」であった。猪越先生の文章を拝見して、なるほど、そういうことであったのか、と改めてその処方の重大性を認識した次第であった。やがて、同処方は患者さんに飲んでもらったら、ものすごく効果がよいということで、大学研究者との共同研究を経、イスクラ産業のご努力を得て、ついに「冠元顆粒」という名称で日本に誕生することになった。発刊第1号から空虚な情報ではなくて、実利を生み出す画期的な方剤を紹介できたのは、まことに幸運であった。「活血化瘀」「瘀血」という日本漢方ではあまり認知されていなかった分野で、確かな理論と経験があり、しかも幅広い有効方剤が創出されていることがわかって、新鮮な驚きをもって迎えられたようだった。創刊号の特集は針麻酔関係ではなく、「虚血性心疾患の治療」という中医内科の疾患から始まった。中医学とは針麻酔だけではない、中医，中薬もすごいんだ，ということを，初めて日本に知らせることになった。

ほとばしる熱意の結晶

猪越先生は昼の仕事で忙しいのに、幾晩も徹夜を重ねて大量の中国語文献に目を通し、翻訳をしてくださった。「いい勉強をさせてもらいました」

と目を腫らしながらおっしゃっていたのを思い出す。どうして報われない仕事のためにこれほど献身的に尽くしてくださるのか、不思議な思いだった。猪越先生だけではない。その後も多くの先生がたが無私のご援助をくださった。これには頭が下がった。

北里大学付属東洋医学研究所の医長をされていた松本裕先生は、『中医臨床』創刊号に「日本漢方と中医学の違い」という文献の翻訳を推薦してくださった。これは日本漢方と中医学に違いがあることを初めて明らかにした歴史的な文献であった。

日本漢方協会の根本幸夫先生は、「日本では傷寒論が大事だ。中国が傷寒論をどうとらえているか、それを報道すれば日本の漢方家に喜ばれる。」と強く薦めてくださった。そのおかげで第３号の「傷寒論特集」が実現し、その流れで 1982 年の「日中傷寒論シンポジウム」「張仲景学説シンポジウム」へとつながった。藤平健先生や伊藤清夫先生、勝田正泰先生はじめ日本漢方協会の先生がたが暖かく励ましてくださり、親切なアドバイスをくださった。ずいぶんと可愛がっていただいた。

重要な役割を果たした翻訳者たち

『中医臨床』の創刊から今日まで、翻訳者の先生がたのご尽力にはいくら感謝しても感謝しきれない。今日までで約 150 名の翻訳者がご協力くださった。安い原稿料でほとんどボランティアのような仕事であった。これらの先生方のご協力なしに『中医臨床』は存在しなかった。翻訳者のおかげで、中国の情報をきれいな日本語で読ませてもらえるのである。

当時の翻訳は大変であった。まず辞書がなかった。中医辞典はおろか、中国語辞典さえまともなものはなく、漢和辞典で難解な中医の用語を一字一字想像しながら手探りで訳したものだ。まさに杉田玄白の世界だった。

四字成句がなにを意味するのか理解できず、「健脾利湿」は「脾を健やかにし、湿を利する」と漢文読みだ。その意味が理解できず、ただ文字を入れ替えただけの翻訳であった。その後、兵頭明先生らが帰国して中医学の全体像を解説してくれてはじめて、四字成句が生理・病理・病態・治法・薬性などを示す高度に概括された概念であることが明らかになり、「健脾利湿」をそのまま専門用語として使うことになった。

最初のころは、翻訳のご協力をいただいた先生方は、ほとんどが漢文読みであった。正規に中国語を習われていたのは浅川要先生ぐらいのもので、あとはみな漢文読みであった。やがて留学生たちが帰国して中国語のわかる人々が翻訳陣の中核となった。しかし、かれらも日本漢方や日本鍼灸の読み方がわからず、ずいぶん苦労をした。

中医の翻訳で苦労するのは、まず漢時代の内経や難経、傷寒論や金匱要略など古典の読みである。これは日本漢方や日本鍼灸の世界ですでに読み込まれていたり、古典のテキストがあるので助かるが、中国の古典は日本で未訳の文献も多い。内経さえ翻訳書が出たのは、ずいぶん後になってからだ。

もっと困るのは、明清時代の文章だ。現代中国語とも違い、古典とも違う。実に読みづらい文章だ。私も現代中国語をやったが、明清の文章には大いに手こずった。漢字を置き換えるだけでは翻訳にならない。意味を理解して初めて内容を伝えることができる。翻訳者は中医学の最初の会得者でなければならない。責任重大な仕事なのである。

西も東もわからない素人の編集子に大勢の先生方から貴重なアイディアと智恵、そしてお力を与えていただいた。『中医臨床』はこれらの先生方の共同製作であった。時代の変化を感じ取った人々が、使命感に突き動

かされ、溢れるばかりの情熱をそそぎ込んで実を結んだ熱意の結晶体であった。中医学は時代が求めていたのだということを、ひしひしと感じさせられる。

（山本勝司記）